

投稿者は、70代後半（登山歴60年）の男性で、7日間かけて大峰奥駈道縦走を計画していました。

しかし、予定の7日間を過ぎても帰宅せず、連絡がないことから、心配した家族が警察へ届け出たもので、捜索の結果、入山から12日後に防災ヘリコプターに無事救出された山岳遭難事案です。

この手記は、投稿者が入山した日から救出されるまでの12日間を振り返り作成されたものです。

安全な登山の参考として下さい。

大峰奥駈道3回目の挑戦は、ゴール寸前で無念の敗退

過日の大森山道迷い救出では大変お世話になりました。

3回目の大峰奥駈道の完走挑戦でしたが、玉置山から南を歩いたのは初めてで、下見なしの走破を試みたことを反省しています。

何回か下見をした上で完走を目指すべきという初歩的な事を忘れておりました。

大峰南部の水場の少なさを今回のような荒れた山で味わい、その恐ろしさを思い知ることも出来ました。

反省材料の多い山旅となってしまいました。

この次に奥駈完走を目指す時には、南奥駈道（玉置山以南）の下見を充分に行ってから出かけるように致します。

本当にありがとうございました。

今回の挑戦での敗退の原因はいくつかありますが、以下思いつくままに箇条書きにします。

① テント設営と撤去に手間取った

快適性を重視して、1人用テントを持って行きましたが、緊急時には設営に手間取ります。

シングルウォール型かツェルトにするべきでした。

この季節だと、無人小屋が満員になることはないのですが、キャンセル覚悟で小屋に予約を入れ、ツェルト持ちにするべきでした。

また背中に背負ったサーマレストはかさばって、倒木の下を潜

り抜けるときに引っかけりえらく体力を消耗しました。

厳冬期でない限り、薄手のものを使うか、少し重くなるが、エアマットにすべきでした。

水場のないところで、雨中露営するときには、フライシートに降った雨を集めると水の補給ができます。

1時間ほどで約500cc集めることが出来ました。

霧氷のかけらを口に含むと多少気休めにはなりましたが、蒸留水で作った氷の味がしました。

ミネラル成分ほぼゼロなので、そのままでは体に悪そうです。

② 水場のこと

塔の谷峠から玉置山までの間、21世紀森林公園に途中下山しない限り、水場はありません。

タイムロスを恐れて水補給をせず玉置山まで歩きましたが、いささか脱水症状になり、思考力と判断力が衰えたようでした。

森林公園は通話可能エリアでしたし、ここへ下りて家族に連絡し、残りの食料で1泊して途中撤退すべきでした。

大森山の882メートルピークを目の前にした沢で、苔むした水場を見つけました。

いざと言う時には役立ちそうです。

メインルートから直線距離500メートルほどのところですから軽装であれば20分くらいでいけそうです。

③ 通信手段のこと

サービス会社による通信可能エリアについて勉強不足でした。

行仙宿から南での通信が限局されていました。

行仙宿では不可。少し登り返したら通信可、大森山のビバーク現場では通信可、玉置山では不可でした。

④ 食糧計画のこと

基本的には正しかったと思います。

準備した総カロリーは約23000キロカロリーです。

少なくとも約12日分の食料を持った事になります。

食料の総重量7.5キロを含め、初日は約25キロのリュックを背負いました。

キャベツ、チシャ、みかん、マイタケ等の野菜果物はかさばり重たかったですが、これらそのものが水分補給に役立ちましたので、大いに救われました。

水場のない所を歩く時には、水分の多い野菜、果物を持って行くのも良いかもしれません。

筋肉の疲労を防ぐには必須アミノ酸を含むタンパク源が必要だということを実感しました。

イワシやニシンの缶詰はかさばり重いですが、これらを朝食に食べるとその日の筋肉は元気です。

しかし、もう少し軽くすべきでした。

燻製肉等を作るべきでした。

⑤ 衣類のこと

ほぼ問題ありませんでしたが、替えのショーツを忘れました。

⑥ 体力のこと

水分補給が不足し、脱水症状になると思考力、判断力とも薄れます。玉置山の登りでは風の音に乗って般若心経の合唱が聞こえてきましたが、幻聴でした。軽い脱水症状になっていたようです。

食料が十分にあり、休息を取れば体力に問題は無いようだったのですが、高齢者の登山はスローペースなので、日照時間の短い晩秋は時間との闘いになります。

日が暮ればテント泊と気楽に構えていましたが、テントの設営・撤去に時間がかかる為、日の出ている間での行動時間が短くなり、暗い場所での手間取る時間が増えてしまい、体力を消耗しました。

⑦ ルートファインディングのこと

私が持っていた地図ですが、夜間登山では役に立ちませんでした。

日中であれば周りの山の様子から現在地の確認はたやすく出来

ます。

しかし真っ暗な場所では地図を見ても正確な現在地を確認出来ませんでした。

GPSは専用機とスマホアプリを含めて3種類持っていました。

行者還岳近くの夜間登山では、GPSの助けでメインコースに戻ることができました。

私はもっとGPS専用機の扱いを勉強すべきでした。

⑧ 救援機から遭難者位置の確認の難しさ

大峰山系は深い森が大部分なので、ヘリコプターから遭難者の位置確認が非常に難しいそうです。

ヘッドランプの光をヘリコプターに向けるよう指示されましたが、急斜面でヘッドランプを取り出すのが難しく、スマホの灯りをヘリコプターに向けました。

灯りがヘリコプターから確認できたのかどうかはわかりませんが、結局のところ、私から救援機を見て、相対的な位置情報を伝えたのが救出の役に立ったようでした。

幸い、携帯の充電器を2個持ち、平地宿で充電しておいたのに助けられました。

**五條署の防災担当者、その他の皆様、防災航空隊の皆様、
本当にありがとうございました。**